



新収作品：
ピエール・ボナール《坐る娘と兎》

New Acquisition:
Pierre Bonnard
Young Girl Sitting with a Rabbit

昭和61～62年度の新収作品および展覧会について

On the New Acquisitions and the Exhibitions in 1986-87

A. 昭和61年度

1. 新収作品

本年度の購入作品は絵画2点、即ちモーリス・ドニの《雌鶏と少女》およびクロード・モネの《黄色いアイリス》である。

西洋美術館は松方コレクションに17点のドニの油彩画を所蔵するが、それらは最も早い作品でも1913年の制作になり、他の多くは1920-21年ころのものであって、この画家の活動の最盛期に当る1880乃至90年代のナビ派時代のもを欠く憾みがあった。今回購入の作品(1890年)はまさにこの欠を補う力作であるのみならず、懸物を想わせる幅の狭い縦長の画面、奥行きを浅い平面性、強い色彩の対比による装飾性、それにこれまた印章に似た署名など、いわゆるジャポニスムの様式を端的に示す作例である。少女と雌鳥とを正対して把えながら、背景は高所から俯瞰するアンバランスな構図を意識して作っている。賦彩に点描技法が用いられているのもこの時期に似合わしい。いわゆる「開かれた窓」とか「視覚錐体の断面」というルネッサンス時代以来長く続いた西洋絵画の伝統は最早やここには見られないものとなっている。

他方モネの《黄色いアイリス》は当館所蔵のモネ画中最高の傑作である《睡蓮》(1916年)とほぼ同期の制作になり、画布の高さも一致する。従ってこれをオランジュリーの壁面大装飾画のための一連の制作中に位置付けて考えることは大きな蓋然性をもつと言える。アイリスの葉の渦を巻いて上昇する描写のごときも、ジヴェルニーの池に枝垂れる柳の反射映像と強く連関するものである。即ち本作品もまたジャポニスムの様相を顕著に示しており、ドニ、モネのこれら2作は昭和63年度に予定される当館でのジャポニスム展の資料としても貴重なものとなる。

2. 展覧会

本年度に当館で開催された特別展は、「ターナー展」(8-10月)、「エル・グレコ展」(10-12月)そして「アルノルト・ベックリー展」(昭和62年1-3月)の三つである。このうち最後のベックリー展が自主展である。

「ターナー展」は日本経済新聞社およびブリティッシュ・カウンシル(東京)との共催展である。ターナーは19世紀英国の大画家というよりもむしろ西洋の代表的な風景画家として早くに日本に知られていた。そのことは漱石の『坊ちゃん』その他に彼の名が幾度か見出だされることから瞭かである。従って彼の作品の本格的な展覧会はつとに待望されながら種々の困難や制約のためにこれまで実現をみなかった。しかる処来年彼の300点の油彩画と19,000点の水彩画を収蔵するクロウ・ギャラリーがロンドンに開館される直前という好機をとらえてテート・ギャラリーの

全面的な支援の下に内外の多くのコレクションからの油彩画51点、水彩画60点、計111点をもって一大ターナー展を組織することができたのは喜びに耐えない。

ターナーは1851(嘉永4)年、即ち安政の開国に3年先立って死去しているが、その後次第に欧米を訪れて西洋の美術に接するようになった日本人が早くにターナーの芸術に親愛と理解を示したのはそれが伝統に捕われることなく素直に自然を対象とするものであったからである。しかもターナーの制作は19世紀前半という時点において斬新であったに留らず、その後半を飛び越して今世紀の美術に大きな影響を及ぼすほどの革新性をも具えていた。そのことが生誕200年(1975)をすぎた今も彼の芸術が大きな共感を呼び続ける所以である。カタログにターナー研究の権威として令名のあるマーティン・パトリン、アンドリュー・ウィルトン(以上テート・ギャラリー)それにイヴリン・ジョル三氏の寄稿を得たこともこの展観を重からしめるものであった。

「エル・グレコ展」は東京新聞との共催展である。これもまた先きのターナー展と同じく一人の画家の画業に焦点を当てた個展であるが、およそ400年以前の古大家の作品をその生涯の発展を追うに足るだけ集めることには多大の困難が伴った。しかし最初期より晩年に及ぶ優に半世紀を越える長い制作歴をカバーする46点の出品を得、またその中にはイリュースカスのラ・カリダー病院に在ってこれまで門外不出とされて来た《聖イルデフォンソ》や、19世紀末に上下に切断されてマドリードとアテネに分蔵される《受胎告知》の100年ぶりの合体展示等を含んでおり、さらには特に「受胎告知」というテーマの作品を6点集めて同一主題による作風の発展を觀照するなどの工夫も凝らされた。我が国に在るエル・グレコ作品として著名な大原美術館の《受胎告知》が、そのもう一つのヴァージョンであるブタペストの絵と並んで展示されたのも大きな話題を呼んだ。個展として画期的な本展が実現をみたのは、1982年にマドリードとアメリカの三都市で開催された「トレドのエル・グレコ」展の企画者であるオハイオ州のトリード美術館長ロジャー・マンドル氏、スペイン側を代表して出品交渉の労をとられたブラド美術館副館長マヌエラ・メナ女史、並びに上智大学教授神吉敬三氏の助力によるところが大きい。以上の三氏及び、カタログの執筆に多大の労をとられたマドリード自治大学講師フェルナンド・マリーアス氏等に対し深く謝意を表するものである。

「アルノルト・ベックリオン展」はスイスのプロ・ヘルヴェティア文化財団の後援により、バーゼル美術館からの油彩39、素描37、計76点の作品をもって構成された自主展である。これに我が国内に在る油彩1点が参考作品として併展された。ベックリオンの名は明治末年から本邦の一部の人々には識られていたが、その本格的な展観は本展をもって我が国嚆矢とする。当館は4年前に同じくプロ・ヘルヴェティア財団の援助を受けて「ハインリヒ・フュースリ展」を開催したが、ベックリオンの芸術にはフュースリの流れを引く北方浪漫主義の幻想に加うるにさらに近代的な象徴性がある。しかし彼は奇しくもその歿年(1901)が示すように正銘の19世紀人であって、またいわゆる「世紀末美術」とも一線を画したところのある孤高の芸術家であった。フュースリにしてもベックリオンにしても彼らの芸術はその教養と思想の自らなる発露であって決して時流に阿った付焼刃的なところがない。当館では2年後にはマックス・クリンガーの展観をも計画しているが、このように一般には余り知られることのない、しかも美術史上に的確な足跡を印

した芸術家を紹介し、今日の眼をもって彼らの存在の意義を測ろうとする試みは自主展にこそ相応しい課題であると考えている。ベックリン展の開催に当り貴重な作品の数々を快く貸与し、またカタログの執筆にも当って下さったバーゼル美術館長クリスティアン・ゲールハール氏および館員の方々の好意に深く感謝するものである。

B. 昭和62年度

1. 新取作品

本年度は昭和50年以来2度目の補正予算による購入を認められたので、絵画4点、彫刻1点、版画4点(440枚)、書籍(版画入り)7点を新しく取得することができたのは悦ばしい。

先ず絵画は、ピエール・ボナールの《坐る娘と兎》、アンソニー・ヴァン・ダイクの《ディエゴ・フェリーペ・デ・グスマーン、レガネース侯爵》、ポール・シニャックの《サン=トロペの港》およびジョヴァンニ・ドメニコ・ティエポロの《聖母子と三聖人》である。

ボナールの《坐る娘と兎》(1891年)はジャポニスムの典型的作例の一つとして知られ、来年度に当館で開催を予定するジャポニスム展関係の資料としても極めて重要な作品である。浮世絵版画の美人図(例えば歌川国貞など)の構図や色彩を大胆に翻案して、従前の西洋絵画には見られなかった極めて平面的、装飾的な画面の創造に成功している。当館所管の松方コレクションにはボナールを欠くので、本作品の取得はその点からもまことに意義深いと言うべきである。

ヴァン・ダイクの《レガネース侯爵》(1634年ころ)にはこれと殆ど同一の作品がマドリードのスペイン・アメリカ銀行コレクション中にあり、従来の見解ではそれをオリジナルとし、長らく英国の個人コレクションにあった本作品はそのレプリカであるとされていた。しかし購入に際し両画を詳細に比較検討した結果、その関係は逆であろうとの見解に達し購入に踏み切った。即ち本作品は衣服やバック等細部の完成度は低いものの、肖像画として最も重要な顔面や両手の描写は極めて高い臨場感をもつ。これに対しマドリードの絵は全体に筆を加えすぎているとの印象を否み難い。古来貴顕の肖像画制作に際し画家はなるべく短時間のうちに顔や手の写生に全力を注ぎ、あとは画室で衣服や装身具等を描くのが定石であったことを考え合わせると、むしろマドリードの絵が本作品に基いて、例えば贈答用に作成されたレプリカであるかと思われる。本作品にレガネース侯爵家コレクションの蔵品番号が確認されることも、それがオリジナルとして発註者の手許に置かれていたものであることを推定させる。

シニャックの《サン=トロペの港》は画家38歳の年(1901)の大作であるが、新印象主義運動の盟友スーラの死別(1891年)後10年を経て描かれた本作品においては、点描技法本来の狙いである視覚混合よりもむしろ大きな色粒を用いて色彩の対比を強調し全体に装飾的效果を高めようとする傾向が認められる。また大画面の構図には例えばクロード・ロランの風景画などを想わせる要素があつて、本図の制作には实景の印象よりもむしろ美術史的な感興がはたらいたことを推測させる。当館はこれまでシニャックの作品としては水彩と版画を所有するのみであったので、ここに初めて彼の本格的な油彩画を加ええたことは悦ばしい。

《聖母子と三聖人》の画家ジョヴァンニ・ドメニコ・ティエポロは、18世紀ヴェネツィア画壇の巨匠ジョヴァンニ・バッティスタ・ティエポロの息子である。彼は父親の助手、また後継者として長年その工房にあって活動し、ヴェルツブルク、ヴィチエンツァ、マドリードなどで父の仕事を手伝っている。即ち彼は父親の忠実な分身であったが、しかし自身の独立した作品においては風俗画的な傾向を加えるなどの新味をも示した。

この絵が父の幾つかの先行作品からモチーフを借りていることは瞭かであり、それらとの関連等から推定して1750年代の制作になるものとすれば、父親(1770年歿)の存命中の作品で、おそらくヴェネツィアもしくはその近辺からの注文によって家庭向きの小祭壇画として描かれたのであろう。小品でありかつまた父バッティスタの迫力には欠けるものの、18世紀ヴェネツィア絵画の一好例である。

次に彫刻はアリストイド・マイヨールの《夜》(1909年)1点で、本作品を加えて当館所蔵のマイヨールは計7点となった。これは初期の大作の一つとして定評のあるもので、現在世界各地に12点存在する。その中番号入り6点はアメリカに5、ドイツに1ですべてフランス国外にあり、またフランスの国家鑄造が2点(チュイルリー公園とマイヨール美術館)ある。本作品はそれら以外の番外鑄造4点中の1つで、石膏原型を所有するディナ・ヴィエルニの証言によれば、1925年ころ鑄造されて作者マイヨールの手許に置かれていたものと言うが、残念ながら確証はない。青緑のパティナ(鏽)が大そう美しく、当館ではヴィエルニ夫人の希望により室内に置いて展示しているが、形や大きさから考えて戸外の然るべき場所に何れは移すことが望ましい。

版画は本年度において著しく収蔵品の増大をみた。それは何よりもジャック・カロの作品422点と書籍7冊を購入したからである。その数は彼の全版画の四分の三強に当り、美術館の版画の取得のあり方としては最も望ましい形となった。僅か十数年という短い活躍期に驚異的な多作を残して43歳で世を去ったこのフランスの版画家は、《日本23聖人の殉教》1作により我が国とも不思議な因縁をもっている。

彼の代表作の一つ《戦争の悲惨》連作が示すように彼はまさに三十年戦争の渦中に生きた人であり、また祝祭図とかコンメディア・デラルテなどに取材した多くの宮廷的作品は9年間に及ぶ彼のメディチ家への出仕から生れたものである。同時に存在したこれら二つの全く相反する世界の映像が、洗練、軽妙、洒脱そしてまた辛辣を極めた彼の芸術を形成している。今回取得した版画はすべてローザンヌ市の収集家サムエル・ジョゼフォヴィッツ氏から一括して譲り受けたが、氏のコレクションに在ったことは画質の高さを証するものである。

またジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージの連作《牢獄》の第2版は、当館がすでに所蔵する第1版と構図上に大きな変化を示すことで版画史上有名な作品である。両版の制作にはおよそ10年の間隔があり、一般には明暗の対比を強調したこの第2版の方が完成作と考えられている。大幅な加筆や変更のきくエッチングの可能性を極限にまで追究し、版画芸術の真髄を味あわせてくれる点でピラネージの上に出る画家は稀である。今後当館における《牢獄》シリーズの展示はこれら両版の対置を原則とすることになろう。因みに初版は14枚、再版は16枚がそれぞれ1組となっている。

2. 展覧会

本年度に当館で開催された特別展は「西洋の美術展」(3-6月)と、「イギリスのカリカチュア展」(10-12月)の二つである。このうち後者がいわゆる自主展で、前者は読売新聞社、日本テレビ放送網および欧州評議会と当館による共催展であった。

自主展は《ホガースからホックニーへ》という副題が示すように、18世紀初頭から現代に至るイギリスのカリカチュアを、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館等から提供された158点の水彩画、素描および版画によって構成し、その展開を示すとともに気楽に面白さを味ってもらおうという異色の展観である。カリカチュアは元来イタリアで始まったと言われるが、早くにイギリスに根を下ろして独自の発展を遂げた。諷刺の対象とされた素材が専ら時事に偏しているため、委曲に通じないものには極めて理解し難い面があることは否定できないが、その祖でしかも最大の巨匠ウィリアム・ホガースに関し、わが国では早くに夏目漱石が『文学評論』(明治38-40年)でかなり詳しい紹介を行っていることは特記するに値しよう。彼はさらに筆をレノルズへと進め、その肖像画の本質を性格描写(Character Sketches)と定義しているが、ホガースが性格の多様性を強調してイギリス流の諷刺絵画の基礎を作ったことを考えるならば、漱石の18世紀英国芸術への理解は頗る正鵠を射たものであったと言えるべきであろう。ファン・ゴッホやターナーなどの場合とも同じく、英国の諷刺画についてもまた明治や大正の先覚がすでに一言をなしていたこと、そしてたとえそのことを明確に意識せずともそのような地盤を踏まえてこの展観が成立し、また多くの観客に楽しんでもらえたのであることに想いを致したい。本展開催に当り多大の尽力を頂いたヴィクトリア・アンド・アルバート美術館のライオネル・ランボーン氏に対し深甚の謝意を表するものである。

他方の共催展である「西洋の美術展」もまた極めて異色ある展観であった。欧州評議会(Council of Europe)が戦後間もなく加盟各国の諸都市で主催して来た展覧会の第20回展であり、しかもこの度初めて欧州域外の日本が開催国とし扱われたのであった。その意味ではこれは一種の万国博覧美術展覧会であったとも言える。評議会内には加盟各国の専門家からなる組織委員会が設けられ、メイン・テーマが「ヨーロッパ美術の空間表現」と決定した第3回委員会からわが国立西洋美術館はこれに参加した。展示は7部門、即ち古代、中世、イタリア・ルネッサンス、北方ルネッサンス、17-18世紀、19世紀、20世紀に分けられ、計120点の作品が本館と新館のすべての部屋を使って展示された。列品にはアクロポリス美術館の名作《コレー》、ポンペイやスタビア出土の壁画、8-10世紀の古写本等からアンブロジーオ・ロレンツェッティ、ヤン・ファン・エイク、フラ・アンジェリコ、ボッティチェッリの《書斎の聖アウグスティヌス》、マンテーニャの《死せるキリスト》、ミケランジェロの大カルトン《三人の兵士》、ラファエルロの《エゼキエルの幻想》やタピスリー《奇蹟の漁り》、カルパッチオ、ティツィアーノ、ヴェロネーゼ等々のイタリア・ルネッサンスの巨匠たち、また北方ルネッサンスはデューラーの板絵《瞑想する聖ヒエロニムス》、クラナッハ、バルドゥック等、バロックではカラヴァッジオの《眠るキューピッド》、ペラスケスの《東方三博士の礼拝》、プッサン、クロード・ロラン、ルーベンスの大作《四大陸》と《キリスト哀悼》、ヴァン・ダイク、レンブラント、フェルメールの《手紙を書く婦人》、ボットォの

天井画習作、ゲインズバラの婦人肖像、そして19世紀へ入ってゴヤの大作《巨人》、ターナーの《ジュリエットと乳母》、カスパール・D・フリードリヒの四季図などを初めとしてクールベ、マネ、モネ、ドガ、ゴーガン、セザンヌ、クリムトラを経て、ピカソ、ブラック、ボッチョーニ、シャガール、カンディンスキー、モンドリアン、クレー、エルンスト等の20世紀美術へ至る。2,000年に及ぶ欧州、即ち西洋美術の展開を各時代の代表的作品を網羅して示そうとするこの大展示会は、欧州評議会という国際的組織とその展示会の伝統、そしてそれを受ける日本の国力の進展があればこそ可能な企画であった。幸いにして1日の平均入場者9,000名という近年稀な盛況を呈したが、各国よりの来日者も百数十名に上るなど設営をめぐる諸般の業務は煩雑かつ多忙を極めた。ここに関係各位の献身的な協力に対し深く感謝の意を表するものである。

またカタログには各部門責任担当の組織委員10氏の概論と出品館員諸氏による作品解説の他、特にE・H・ゴンブリッチ教授の「西洋美術と空間の知覚」およびG・C・アルガン教授の「西洋美術とその古代観」と題する長篇の序文が寄稿されたことを喜びたい。

3. シンポジウム

「西洋の美術展」に関連して日本および西洋の美術の空間表現をめぐる国際美術史シンポジウムが4月2-4日の3日間、東京の経団連会館国際会議場において当館、美術史学会、読売新聞社、日本テレビ放送網および欧州評議会共催のもとに開かれた。パリでの最終の組織委員会での件が正式に決定されると日欧双方にシンポジウムのための準備委員会が発足し、日本側5名、西欧より7名、計12名の発表者が選ばれた。その顔振れと演題は次のごとくである。

前川誠郎(当館々長)「日本美術の特質」

水野敬三郎(東京芸大教授)「日本の仏教彫刻とその空間」

田口栄一(東京芸大助教授)「日本古代中世仏教絵画における空間表現」

村重寧(東博絵画室長)「やまと絵における空間表現」

戸田禎佑(東大教授)「日中絵画における水墨的空間表現」

サルヴァトーレ・セッチェス(ピサ高等師範学校教授)「『偽装された壁』、古代ローマの庭園画におけるイメージと空間」

ヴェリバルト・ザウアーレンダー(ミュンヘン中央美術史研究所長)「中世キリスト教美術における空間に関する考察」

ポール・フィリップ(ブリュッセル大学教授)「ゴシック後期からルネッサンスに至るアルプス以北の造形空間」

アレックスサンドロ・パロンキ(フィレンツェ大学教授)「ジオットからティツィアーノまでの空間の表現」

ジャック・テュイリエ(コレージュ・ド・フランス教授)「南ヨーロッパにおける空間とバロック美術」

リュクル・デ・フリース(フローニンゲン大学助教授)「北方バロック美術における空間」

ロバート・ローゼンブラム(ニューヨーク大学教授)「19世紀および20世紀初頭の絵画における

空間について」

講演および討論は同時通訳(日, 英, 仏語)によって進められた。またシンポジウムに先立って発表者全員による京都・奈良への見学旅行が行われ, 日本美術に対する認識を深める機会を得たことは, 討論を効果的ならしめる上で極めて有意義であった。

館長 前川誠郎